

国見とブラジルのサッカー選手育成の比較

Compare Kunimi with Brazil in soccer player training

1K03A203-1

松橋 優

指導教員

主査 寒川恒夫先生

副査 大榎克己先生

序章

現在、Jリーグに所属する選手の3割がクラブユース出身であることから大卒選手も含めて約7割は高校サッカーを経験しているこの事実から見ても高校サッカーは日本サッカーにおいて重要な1ステージであるといえる。この高校サッカーにおいて輝かしい成績を残している高校がある。そ長崎県立国見高等学校である。国見高校は全国高等学校サッカー選手権大会に21年連続で出場しており、大会史上、最多連続出場記録となっている。本年度は惜しくも全国高等学校サッカー選手権大会への出場を逃し、連続出場記録は途絶えてしまったものの、航行サッカーに不動の地位を築いているといってもよい。一方で、世界のサッカーに目を向けると、そのなかで一際輝きを放っている国がある。それはブラジルである。ブラジルは大会史上最多の5回の優勝を誇り、ヨーロッパのクラブシーンでも多くの選手が活躍し、本年度のパロンドール(欧州年間最優秀選手)には同国代表のカカが選ばれている。今後も世界のサッカーシーンはブラジル抜きには語れないといってもよいほどブラジルはその地位を確立している。この両者を比較することによって日本と世界のサッカーの育成の違いを明らかにし、国見サッカーの発展につなげたい。

研究の概要

第2章では国見高校に小嶺忠敏氏が赴任してからの国見高校の歴史、また、九州サッカーの発展経緯、国見高校での哲学や、小嶺忠敏氏の目指すものについてまとめた。

赴任当時、国見高校は長崎県の新人戦で1度だけベスト8に入ったのが最高成績という弱小チームだった。しかし、赴任した翌年には、「先生のもとでサッカーをして全国へ行ってみよう！」を合言葉に、地元長崎や熊本から新1年生約10人が国見高等学校に入学してきた。そして、3年後の冬、国見高等学校は全国高校サッカー選手権大会の決勝戦の場、東京・国立競技場にいた。

九州のサッカーは福岡商業高等学校、大分工業高等学校、島原商業高等学校の「3校リーグ」を結成し、11年後の1984年に島原商業高等学校が全国高校サッカー選手権大会を制覇して以来、2005年までの21年間で九州の高校が全国高校サッカー選手権大会優勝11回、準優勝が5回と今ではサッカー王国と呼ばれるようになった。

国見高校では、「レギュラーになれなくても、サッカ

一部の3年間を人生で生かせ」という言葉をもとに、謙虚であること求め、人間的にも成長する3年間になるような指導をしていた。

また、小嶺忠敏氏は1. チーム(国見高校)が日本一になって、県民に喜んで頂くこと。2. 教え子から日本代表の選手を育てること。3. 日本の代表となる指導者を育てること。ということを目指し掲げ、長崎にサッカーが根付く音を願いながら指導していることがわかった。

第3章ではブラジルがいかに関世界のサッカーシーンで確固たる地位を築いているかに言及した。ブラジルは史上最多の過去5度のW杯優勝を誇り、また、国外で1000人以上の選手が活躍するなど、プロサッカー選手の輸出大国として世界で一大勢力を築いていた。

第4章では国見とブラジルの育成における比較を行なった。ここでは、「科学的トレーニングの取り入れ方」「地元帰属精神」「褒めるという育成方法」「人的ネットワークという財産」の4点に絞り、比較検討した。その結果として、共通点、相違点双方見つけたが、ブラジルは

伝統に裏打ちされたブラジルのメンタル面での育成方法を見た反面、科学的データに基づく効率的な室を求めるトレーニングを行なうなど、温故知新の精神をブラジルの育成から感じた

まとめ

日本のトップクラスに行く国見においても世界のトップであるブラジルと比べるとまだまだ足りないところがあった。本研究では具体的な戦術や技術に対する指導ではなく、フィジカル面、メンタル面や地元との密着といったサポート体制に注目して比較をしたが。そのなかで、伝統に裏打ちされたブラジルのメンタル面での育成方法を見た反面、科学的データに基づく効率的な室を求めるトレーニングを行なうなど、温故知新の精神をブラジルの育成から感じた。ドイツW杯以後、日本サッカーの「日本化」が叫ばれるようになったが、これは、最新式のトレーニングばかりではなく日本にあった、日本の伝統に沿った育成も必要だという考えのあらわれではないか。日本もブラジルのように独自の哲学を持ち、ブラジルのよいところは取り入れ、日本のよいところを伸ばしていく育成方法の発展が望まれる。